

数行われ、活発な質疑がなされた。下記に代表的な報告を示す。

- 「長野県出身大卒者の居住地分布の変化—1970年代の人口移動転換に着目して」  
.....竹下和希（筑波大・院）
- 「人口学的観点からみた東京都区部における「都心回帰」の動向」  
.....小池司朗（国立社会保障・人口問題研）
- 「三大都市圏における単身世帯の年齢の多様化に関する一考察」 .....桐村 喬（皇學館大）
- 「東京大都市圏の夫婦の最終的な子ども数と文脈効果」 .....山内昌和（国立社会保障・人口問題研）
- 「転換期中国都市における郊外の形成と住民ライフコース—北京市回龍観住宅団地の事例」  
.....王 天天（東京大・院）
- 「中国における都市新市区の居住者の属性と居住地選択—新市区住民と旧市区住民との比較から」  
.....滕 媛媛（東北大・院）
- 「東日本大震災被災地周辺自治体の人口分布変動—2015年国勢調査抽出速報集計による分析」  
.....丸山洋平（福井県立大）・吉次 翼（日本商工会議所）
- 「最近の主要死因別死亡率の季節変化」 .....北島晴美（信州大）  
（山内昌和 記）

## 第17回社会保障審議会人口部会

第17回社会保障審議会人口部会は、2016年10月3日（月）15:00～17:00、厚生労働省省議室において開催された。最初に、「日本人の平均余命（平成27年簡易生命表）」（厚生労働省政策統括官（統計・情報政策担当））、「第15回出生動向基本調査」（国立社会保障・人口問題研究所）の二件の報告がなされ、質疑応答が行われた。その後、国立社会保障・人口問題研究所から「将来人口推計の方法と検証—平成24年推計の仕組みと評価—」について説明がされ、議論が行われた。資料の前半は将来人口推計の検証ということで、出生・死亡・移動それぞれの要因ごとに、これまでの仮定設定の変遷とその背景等について説明がなされた。後半は将来人口推計の仕組みとして、平成24年推計の方法論が説明された。委員からは、離死別再婚効果の設定方法やリー・カーター・モデルの修正方法など平成24年推計の仮定設定自体に加え、国連推計と国立社会保障・人口問題研究所推計の出生仮定の比較などについても質問が出され、議論が行われた。（石井 太 記）

## ICD-11改訂会議

2016年10月12日（水）から14日（金）にかけて、ICD-11改訂会議が東京国際フォーラム（東京都千代田区）で開催された。現在日本で使われているICD（国際疾病分類）は第10版であるが、2018年5月の世界保健総会でICDが第11版として28年ぶりに改訂される予定であることを受け、今回の改訂会議が開催された。この会議に先立ち、国際統計分類を担当する各国担当者が一堂に会し、議論、調整、報告を行うWHO-FICネットワーク年次会議も同じ会場で行われ、さらに診療情報管理協会国際連盟（IFHIMA）第18回国際大会、第42回日本診療情報管理学会学術大会も開催された。

ICD-11は、ITおよびインターネット社会に即した、新たなデータ構造となっている。現在、ネット上で暫定版が公開されており、加盟国からのコメントにより随時改善されている。また漢方医学を